

学校法人 四條畷学園

牧田宗太郎

四條畷学園の原点

創立**100**周年記念出版



迷ったとき、私たちは創立者に帰る。

この一冊を、

四條畷学園の未来を担う

すべての教職員へ

牧田宗太郎

四條畷学園の原点

迷ったとき、私たちは創立者に帰る。

はじめに

創立百周年という節目を迎え、私たちは改めて創立者・牧田宗太郎という一人の教育者に向き合いたいと思います。百年という歲月の中で、四條畷学園は大きく発展しました。四條畷高等女学校として歩み始めた学園は、多くの先人の努力によって歴史を積み重ね、今日の総合学園へと成長してきました。

しかし、学園を支えてきたのは、建物でも制度でもありません。創立者が遺した教育への志です。

私は、創立百周年を迎えるにあたり、一つの思いを強くしました。教職員一人ひとりに、創立者を知ってほしい。それは、単に歴史を学んでほしいという意味ではありません。牧田宗太郎が何を願い、何を理想とし、どのような教育を目指したのかを知ってほしいのです。なぜなら、その思想こそが四條畷学園の原点であり、今日の学園を形づくるアイデンティティだからです。

近年、「ナラティブ」という言葉が用いられるようになりました。ナラティブとは、人が何を思い、どのような志を抱き、それを未来へつないでいくのかという物語です。

四條畷学園にも、一つのナラティブがあります。それは、牧田宗太郎が生涯をかけて問い続けた「教育とは何か」という問いの物語です。その問いは、百年前のもではありません。百年を経た今もなお、私たち教職員一人ひとりに問いかけ続けています。

教育に正解はありません。子どもたちを取り巻く環境は変わり、社会も変わります。だからこそ、私たちは日々迷います。教育に迷い、保育に迷い、人との関わりに迷い、学校の進むべき方向に迷うことがあります。

そのようなとき、私はいつも思います。「創立者なら、この場面で何を大切にしたらだろうか。」この問いこそが、四條畷学園の教職員として持ち続けるべき原点ではないでしょうか。

本書は、牧田宗太郎の伝記ではありません。四條畷学園の学校史でもありません。牧田宗太郎という教育者の歩みを通して、四條畷学園とは何かを考える本です。そして、教職員一人ひとりが、自らの教育を見つめ直すための本です。

創立者の歩みを知ることとは、過去を振り返ることではありません。未来への責任を自覚することです。この一冊が、四條畷学園で学び、働くすべての人にとって、原点へ立ち返るための一冊となることを願っています。

学校法人 四條畷学園
理事長 小谷 明

目次

序章	なぜ今、牧田宗太郎なのか	1
第一章	一人の教育者が生まれる	3
第二章	「実践躬行」は母から始まった	5
第三章	世界が牧田宗太郎を育てた	8
第四章	理念は、一つの学園となった	10
第五章	実践躬行	15
第六章	Manners makes man	17
第七章	創立者の理念は受け継がれる	21
第八章	創立者の理念は、今を生きる	24
終章	迷ったとき、私たちは創立者に帰る	27
あとがき	百年の節目に	30
付録	創立者・牧田宗太郎の言葉	33
参考資料		37

序章 なぜ今、牧田宗太郎なのか

学校には、創立者がいます。しかし、その創立者を本当に知っている教職員は、どれほどいるでしょうか。建学の精神という言葉に触れることはあっても、その言葉がどのような人生の中から生まれたのかを知る人は、決して多くありません。四條畷学園も例外ではありません。

私たちは、「実践躬行」という言葉を知っています。「*Manners makes man*」という言葉も知っています。しかし、その二つの言葉が、創立者・牧田宗太郎の六十余年にわたる教育人生の中で育まれたものであることを、どれほど知っているでしょうか。

牧田宗太郎は、学校を創るために生きた人ではありませんでした。教育とは何か。教師とは何か。人を育てるとは何か。その問いを、生涯問い続けた教育者でした。その問いの答えが、四條畷高等女学校となり、今日の四條畷学園となりました。

創立百周年を迎えた今、私たちは何を受け継ぐのでしょうか。百年という歴史でしょうか。幾万もの卒業生でしょうか。新しい校舎でしょうか。もちろん、それらも学園の誇りです。しかし、本当に受け継ぐべきものは、それらではありません。創立者が遺した教育の理念です。

社会は変わります。教育制度も変わります。子どもたちを取り巻く環境も変わります。それでも、変えてはならないものがあります。創立者が「人を育てるとはどういうことか」を問い続け、その生涯をかけて示した教育者としての姿です。

創立者が何を考え、何を信じ、何を四條畷学園に託したのか。その歩みをたどりながら、私たちは自身の教育を見つめ直すための一冊です。

迷ったとき、私たちは創立者に帰る。その言葉の意味を、本書を読み終えたとき、きっと感じていただけることでしょう。

第一章 一人の教育者が生まれる

創立者にも、幼い日があります。

教師として六十六年の歳月を歩み、「報恩感謝」を建学の精神として四條畷学園を創立した牧田宗太郎も、最初から教育者だったわけではありません。一人の少年として時代の激流の中に生まれ、その時代に鍛えられ、一人の教育者となりました。

宗太郎が生まれたのは、元治元年五月十八日、大阪・桃谷五十軒屋敷でした。徳川幕府の終焉を目にした時代です。牧田家は代々大阪城に仕えた幕府の同心でしたが、時代は大きく動いていました。

宗太郎は『自傳教悦』の冒頭で、自らの生い立ちを次のように語っています。

「私は牧田家九代の当主として元治元年五月十八日に大阪に生まれました。…父虎之丞は当時大阪城に在勤して居たが、やがて鳥羽伏見の開戦となり、大政奉還とともに父は失業し、没落の運命が

我が家に訪れてきた。」

この一節には、時代に翻弄された一人の少年の原点があります。しかし、宗太郎は境遇を嘆きませんでした。没落を経験したからこそ、これからの時代を生きる力は「学び」にあると考えたのです。

宗太郎は学ぶことを何よりも大切にしました。漢学を学び、英語を学び、数学を学び、西洋画を学び、中国語まで修めています。年譜を見ても、その歩みは「学び続けた人生」そのものでした。

そして十四歳、教師として最初の一步を踏み出します。ここから始まる教育人生は六十六年に及びました。大阪、三重、岩手、山口、そして四條畷。それぞれの土地で教育に携わりながら、宗太郎は一つの確信を深めていきます。

教育とは、人を育てること。

その信念は、まだ言葉にはなっていません。しかし、この若き日の歩みこそが、後に「実践躬行」、「Manners makes man」という教育理念へと結実していくのです。

第二章 「実践躬行」は母から始まった

十四歳。多くの少年少女が学ぶ側にいる年齢で、牧田宗太郎は教える側に立ちました。明治十一年十二月、助教となった宗太郎は、ここから六十六年に及ぶ教育人生を歩み始めます。

もちろん、十四歳の宗太郎が完成された教師だったわけではありません。教えながら学ぶ。学びながら教える。その積み重ねが、一人の教育者を育てていきました。

しかし、その土台は、教師になってから築かれたものではありませんでした。宗太郎には、一人の師がいました。母・栄子です。

栄子は、決して多くを語る人ではありませんでした。幼い頃から習字や算術、裁縫を身につけ、家庭を守り、家族のために黙々と働き続けました。苦しい暮らしの中でも愚痴をこぼさず、目の前の務めを誠実に果たす。その後ろ姿を、宗太郎は幼い頃から見続けて育ちました。

宗太郎は後年、母の生き方を振り返り、「実践躬行の人」であったと語っています。これは、自ら

掲げた教育理念を説明するための言葉ではありません。宗太郎自身が最も尊敬した母の生き方を表した言葉でした。

「実践躬行」とは、言葉だけを語ることではありません。自ら行い、その姿によって人に示すことです。教える前に、自ら実践することです。宗太郎は、その意味を母の後ろ姿から学びました。

後年、宗太郎は七十七歳を迎えたとき、父母への感謝を一首の歌に託しています。

あやまたで 七十七年 過ぎし来し 今のうつつに 父母ぞなき

宗太郎は、自分が健康で長く教育に励むことができたのは、父母、とりわけ母・栄子の教えと養育のおかげであると繰り返し語っています。

四條畷学園の教育理念である「実践躬行」は、本館の壁に掲げられた標語である以前に、一人の母の生き方として、宗太郎の心に刻まれたものでした。

だからこそ、「実践躬行」は単なる教育理念ではありません。創立者自身が、生涯をかけて実践し続けた生き方そのものなのです。

第三章 世界が牧田宗太郎を育てた

大正八（一九一九）年、牧田宗太郎は欧米へ向かいました。五十四歳のことです。すでに長い教育経験を持ち、四條畷中学校で教育に携わっていた宗太郎が、それでもなお世界へ出ようとしたのは、教育者として学ぶことをやめていなかったからでした。

この旅は、観光ではありませんでした。名所旧跡を見るための旅でもありませんでした。宗太郎が見ようとしたのは、世界の学校でした。そこにいる教師であり、子どもたちであり、教育のあり方でした。

宗太郎は、欧米の教育制度をそのまま日本へ持ち帰ろうとしたわけではありません。外国の学校をまねればよいと考えたのでもありません。世界を見て、日本の教育を考える。外に学び、内に生かす。その姿勢こそ、宗太郎の教育者としての真骨頂でした。

英国で宗太郎の心に深く刻まれた言葉があります。「Manners makes man」です。この言葉は、後に四條畷学園の教育理念の一つとなりました。

その一方で、宗太郎は米国の学校にも強い関心を寄せました。そこには、子どもの個性を伸ばし、創造力を育てようとする教育がありました。宗太郎は欧米の児童・生徒が描いた美術作品を数多く日本へ持ち帰り、後に展覧会で紹介しています。世界で見た教育は、宗太郎にとって単なる知識ではなく、日本の教育を考え直すための材料でした。

欧米視察は、宗太郎にまったく新しい理念を与えた旅ではありませんでした。むしろ、母から受け継いだ実践の精神、教師として積み重ねてきた教育への問いに、より広い視野と確信を与えた旅でした。

世界を見た宗太郎が最後に見つめていたのは、遠い異国ではありませんでした。日本の子どもたちでした。そして、自らの理想とする教育を、日本の地で実現することこそ、自分に与えられた使命であると考えようになっています。

第四章 理念は、一つの学園となった

四條畷学園は、立派な校舎から始まったものではありません。

門真・古川橋にあった、一棟の古い仮校舎から始まりました。長い年月を経た木造校舎は、決して恵まれた建物ではありませんでした。壁には傷みが目立ち、設備も十分とは言えません。それでも、その校舎には、新しい学校を創ろうという希望と熱意が満ちていました。

大正十五年四月十一日。その仮校舎で最初の入学式が行われました。入学したのは一年生三十八名、二年生二十五名、合わせて六十三名の生徒たちです。百年後の今日から見れば、小さな学校かもしれませんが、しかし、この六十三名の生徒がいなければ、今日の四條畷学園はありません。学園の歴史は、この小さな一歩から始まりました。

この日、牧田宗太郎は満六十一歳でした。十四歳で助教となつて以来、四十七年余り。各地で教職を重ね、欧米へ渡つて世界の教育を学び、その後、校長として学校を導くなど、長年にわたり教育に携わってきました。その長い歩みは、すべてこの日のために積み重ねられてきたと言つて

も過言ではありません。

宗太郎が創ろうとしたのは、学校という建物ではありませんでした。

教育とは何か。

教師とは何か。

人を育てるとは何か。

その問いに、自らの教育実践によって答える学校でした。

宗太郎は、知識だけを教える教育では人は育たないと考えていました。自ら学び、自ら考え、自ら行い、他者を思いやる心を育てること。そのためには、教師自身が率先して実践する人でなければなりません。教師の生き方そのものが教育である。その信念は、母・栄子の生き方に学び、六十年以上にわたる教育実践の中で、揺るがない理念へと育っていきました。

この理念に共感した人々が、宗太郎のもとに集まりました。その中心にいたのが、弟・牧田環でした。実業界で活躍していた環は、兄の理想を深く理解し、学園創設に必要な資金面をはじめ、さまざまな形で支え続けました。

しかし、四條畷学園を生んだものは、資金ではありません。

理念でした。

理念があつたから、人が集まりました。

理念があつたから、協力者が現れました。

理念があつたから、古川橋の仮校舎は、百年を超えて受け継がれる学園の原点となったのです。

宗太郎は、自らの教育理念を二つの言葉に託しました。

「実践躬行」

知っているだけではなく、自ら行い、その姿によって人を導くこと。それは母・栄子から学び、自らの人生を通して磨き上げた、生き方そのものでした。

「Manners makes man」

礼節は人をつくる。人は日々の言葉や振る舞いによって人格を磨き、その人格が社会からの信頼を築いていく。欧米で出会ったこの言葉は、宗太郎が生涯求め続けた教育の理想と深く結びつきました。

この二つの言葉は、決して別々の理念ではありません。「実践躬行」が自らの生き方を示すなら、「Manners makes man」は他者との関わりの中で人格を育むことを示しています。その根底には、「教育とは、人をつくる営みである」という宗太郎の変わることのない信念が流れていました。

宗太郎は、その教育の目的を次のように語っています。

「教育の目的は人をつくることであり、人をつくることは、徳・知・体三育の偏らざる実施によって、健全なる人格を陶冶することにあります。」

この言葉は、一人の教育者が六十六年にわたる教育人生を通してたどり着いた結論でした。そして、この理念こそが、百年を経た今日もなお、四條畷学園の教育の原点として受け継がれています。

古川橋の古い仮校舎は、すでにありません。しかし、そこで育まれた理念は失われることなく、今日も四條畷学園の中に息づいています。

四條畷学園は、校舎から始まったものではありません。牧田宗太郎の理念から始まったのです。

第五章 実践躬行

学校は、創立の日だけで完成するものではありません。理念は、式辞の中で語られただけでは根つきません。校舎があり、生徒が集まり、教師が教壇に立ち、毎日の授業と生活が積み重ねられて初めて、一つの学校は本当の意味で学校になっていきます。

古川橋の仮校舎で始まった四條畷高等女学校も同じでした。設備は十分ではなく、校舎も決して立派ではありませんでした。しかし、その不十分さの中にこそ、新しい学校を自分たちの手で育てようとする熱がありました。教師も生徒も、与えられた環境の中で精いっぱい学び、働き、学校を形づくっていきました。

その日々の中心にあったものが、実践躬行でした。

実践躬行とは、知っているだけで終わらせないということです。語るだけで終わらせないということです。自ら行い、その姿によって人を導くことです。

牧田宗太郎にとって、実践躬行は標語ではなく、教育者としての姿勢そのものでした。

だからこそ、四條畷学園の教育において、実践躬行は本館の壁に掲げられた言葉である以前に、日々の教育の中で生きるべき精神なのです。教師の言葉、授業に向かう姿勢、子どもへの接し方、保護者との向き合い方、同僚との協働。そのすべてに、実践躬行は表れます。

教育は、説明だけでは伝わりません。子どもたちは、教師が何を語るかだけでなく、教師がどう生きているかを見えています。教師自身が学び、考え、行動する。その姿こそが、子どもたちにとって最も深い教育になります。

実践躬行とは、過去の言葉ではありません。今日の教室で、今日の保育室で、今日の子どもたちの前で実践されるべき、四條畷学園の教育の原点なのです。

第六章 Manners makes man

牧田宗太郎は、生涯を通じて「実践躬行」を自らの生き方として貫きました。そして、その理念をさらに深める言葉として、欧米で出会った「Manners makes man」を四條畷学園の教育に取り入れました。

この言葉を直訳すれば、「礼節は人をつくる」となります。しかし、宗太郎がこの言葉に見出した意味は、礼儀作法を身につけることだけではありませんでした。

人は、日々の言葉によって人格をつくります。

人は、日々の振る舞いによって信頼を築きます。

人は、相手を敬う心によって社会の一員となります。

その積み重ねが、その人自身を形づくっていく。それが「Manners makes man」の本当の意味で

した。

宗太郎は、欧米の学校で、教師と生徒が自然に挨拶を交わし、互いを尊重し合う姿を目の当たりにしました。そこでは、礼節は規則として教え込まれるものではなく、学校生活そのものの中に息づいていました。その姿に触れた宗太郎は、「人格を育てる教育」のあるべき姿を見たのです。

しかし、宗太郎は欧米の教育をそのまま持ち帰ろうとはしませんでした。日本には、日本人として大切にしてきた精神があります。世界に学びながら、日本の文化の中で生かす。その姿勢こそが、宗太郎の教育者としての特徴でした。

だからこそ、「実践躬行」と「Manners makes man」は、四條畷学園では決して別々の理念ではありません。

自らが正しいと思うことを実践する。

そして、その実践を礼節ある人格によって支える。

この二つが一つになって初めて、宗太郎が目指した教育は完成するのです。

百年を経た今日、教育を取り巻く環境は大きく変わりました。しかし、子どもたちが人との関わりの中で成長するという本質は、今も変わりません。

挨拶を交わすこと。

相手の話に耳を傾けること。

感謝の気持ちを言葉にすること。

約束を守ること。

自分より先に相手を思いやること。

そうした日々の積み重ねが人格を育み、その人格が人生を支えていきます。

それこそが、牧田宗太郎が四條畷学園に託した「Manners makes man」の精神なのです。

第七章 創立者の理念は受け継がれる

学校は、校舎だけでは百年続きません。制度だけでも続きません。創立者が遺した理念を、一人ひとりの教職員が受け継ぎ、日々の教育の中で実践してきたからこそ、四條畷学園は百年の歴史を歩んできました。

牧田宗太郎が四條畷高等女学校を創立したとき、その理念は創立者一人の胸に宿るものでした。しかし、その理念は教師へ、生徒へ、卒業生へと受け継がれ、やがて四條畷学園全体の精神となっていくます。

「実践躬行」は、創立者だけが実践する言葉ではありませんでした。教師一人ひとりが自らの行動によって子どもたちを導き、その姿を見た子どもたちが、また次の世代へと受け継いでいく。その積み重ねが、四條畷学園の伝統を育んできました。

「Manners makes man」も同じです。礼節とは、特別な場面だけで表れるものではありません。朝の挨拶、授業での言葉遣い、友人との接し方、地域の方々への礼儀。そうした日々の何気ない

行動の中で、人としての品格は育まれていきます。

百年という歴史の中には、多くの教職員がいました。それぞれが時代の課題に向き合い、それだけの教育を実践してきました。教育方法は変わり、社会も大きく変わりました。しかし、どの時代にも変わらず受け継がれてきたものがあります。

それが、創立者の理念です。

理念は、言葉として残すだけでは受け継がれません。理念は、実践されて初めて次の世代へ渡されます。だからこそ、四條畷学園の百年は、「理念を実践してきた百年」と言うことができます。

創立者が蒔いた一粒の種は、多くの教職員の努力によって育まれ、大きな樹となりました。その樹は、今もなお成長を続けています。

百年とは、過去を振り返るための節目ではありません。未来へ理念をつなぐための節目です。創立者から受け継いだ理念は、今日の教職員が実践し、明日の子どもたちへ受け渡していかなければなりません。

それが、百年続く四條畷学園に集う私たちに託された使命なのです。

第八章 創立者の理念は、今を生きる

百年前、牧田宗太郎が四條畷高等女学校を創立したとき、その理念は一つの学校のためだけに掲げられたものではありませんでした。それは、時代が変わっても受け継がれるべき教育の原理であり、人を育てる営みの本質でした。

百年の歳月が流れた今日、社会は大きく変わりました。子どもたちを取り巻く環境は複雑になり、教育に求められる役割も多様になっています。ICTの活用、グローバル化への対応、多様性の尊重など、創立当時には想像できなかった課題に、私たちは日々向き合っています。

しかし、どれほど時代が変わっても、「人を育てる」という教育の目的は変わりません。それが、牧田宗太郎が生涯を通して追い求め、四條畷学園が受け継いできた理念です。

だからこそ、私たちは教育の方法に迷ったとき、流行だけを追い求めるのではなく、創立者の理念に立ち返る必要があります。新しい教育を取り入れることは大切です。しかし、それが「人を育てる」という目的につながっているのかを問い続けなければなりません。

「実践躬行」は、今日も私たちに問いかけています。子どもたちに求めることを、私たち自身が実践しているだろうか。教育とは、言葉だけで伝えられるものではありません。教師の姿勢、生き方、日々の行動が、子どもたちに最も大きな影響を与えます。

「Manners makes man」もまた、今だからこそ、その意味を見つめ直す必要があります。礼節とは、形式的な作法ではありません。相手を尊重し、互いを認め合い、信頼関係を築くことです。その積み重ねが人格を育て、温かな学校文化を育んでいきます。

四條畷学園には、百年という歴史があります。しかし、本当に誇るべきものは、百年という長さではありません。創立者の理念を受け継ぎながら、それぞれの時代にふさわしい教育を創り続けてきたことです。

私たちは、創立者と同じ時代を生きることできません。しかし、創立者と同じ理念を胸に教育に携わることができます。それこそが、四條畷学園の教職員であるということなのです。

百年の歴史は、私たちが守るものではありません。

私たちが、次の百年へつないでいくものです。

その歩みは、今日の教室から始まります。

今日の保育から始まります。

そして、一人の子どもと向き合う、その一瞬一瞬から始まるのです。

終章 迷ったとき、私たちは創立者に帰る

百年前、牧田宗太郎は四條畷高等女学校を創立しました。しかし、宗太郎が本当に遺したかったものは、一つの学校ではありませんでした。時代が変わっても色あせることのない、教育の理念でした。

その理念は、「実践躬行」と「Manners makes man」という二つの言葉に込められ、百年という歳月を超えて受け継がれてきました。それは歴史の中に残された言葉ではありません。今日も四條畷学園で教育に携わる私たちへ向けられた、生きた言葉です。

教職員は、毎日さまざまな判断をしています。子どもへの言葉掛け、保護者との対話、同僚との協力、その一つひとつに決まった正解はありません。教育とは、人と向き合う営みだからです。

だからこそ、迷うことがあります。自分の判断はこれでよかったのだろうか。もっと良い方法があったのではないだろうか。子どものために、本当に大切なことは何なのだろうか。そのようなとき、私たちには立ち返る場所があります。

それが、創立者・牧田宗太郎です。

牧田宗太郎なら、この子どもにどう向き合っただろうか。牧田宗太郎なら、この場面で何を大切にしたらどうか。牧田宗太郎なら、今日の四條畷学園に何を望むだろうか。その問いを持つことは、創立者を神格化することではありません。創立者が生涯をかけて示した教育者としての姿勢を、自分自身の教育に照らし合わせることです。

「実践躬行」とは、自らがまず実践することでした。「*Manners makes man*」とは、人としての品格を磨き続けることでした。どちらも、子どもたちに求める前に、私たち自身が実践すべき教えます。

創立者は、教育の方法を遺したではありません。教育者としての生き方を遺しました。だからこそ、時代が変わっても、その理念は色あせることはありません。教育の方法は変わります。社会も変わります。しかし、人を育てるという教育の本質は変わらないからです。

四條畷学園の歴史は、百年で終わるものではありません。今日という一日も、その歴史のページです。子どもたちと向き合う一時間。保護者と交わす一つの言葉。同僚と支え合う一つの行動。

そのすべてが、次の百年の四條畷学園をつくっていきます。

創立者から受け継いだ理念は、本館の壁に掲げられているだけでは受け継がれません。私たち一人ひとりの実践によって受け継がれます。その歩みが続く限り、牧田宗太郎の理念は、これからも四條畷学園の中で生き続けるでしょう。

迷ったとき、私たちは創立者に帰る。

それは過去へ戻ることはありません。四條畷学園の未来へ向かうために、原点へ立ち返るということです。

あとがき 百年の節目に

学校には、それぞれの歴史があります。

しかし、歴史とは年表ではありません。創立者がどのような志を抱き、その志がどのように受け継がれてきたか。その積み重ねこそが、本当の歴史です。

四條畷学園は、創立百周年という大きな節目を迎えました。

百年という歳月の中で、社会は大きく変わりました。教育制度も変わりました。学園も発展を続け、多くの卒業生を送り出してきました。

その一方で、創立者・牧田宗太郎が遺した理念は、百年前と変わることなく受け継がれています。

「実践躬行」。

「Manners makes man」。

この二つの言葉は、四條畷学園の教育理念であると同時に、私たち教職員一人ひとりへの問いでもあります。

創立者の人生を通して、四條畷学園の原点を見つめ直し、これからの百年を考えるための一冊として編みました。

この本を閉じたあと、読者の皆様が、創立者の理念を今日の教育の中でどのように生かしていくかを考えるきっかけとなれば、これ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、多くの資料をご提供いただいた皆様、取材や編集にご協力いただいた皆様に、心より感謝申し上げます。

そして何より、百年にわたり四條畷学園の理念を受け継ぎ、教育に尽力してこられた歴代の教職員、卒業生、関係者の皆様に、深く敬意を表します。

牧田宗太郎の志は、夫人・隈先生をはじめとする多くの関係者に受け継がれ、小学校や短期大学の開設など、学園の発展へと結実しました。その歩みもまた、創立者の理念が今なお息づいてい

る証といえるでしょう。

この本が、四條畷学園の新たな百年へ向かう、小さな道しるべとなることを願っています。

付録 創立者・牧田宗太郎の言葉

本書では、牧田宗太郎の歩みをたどりながら、その教育理念を紹介してきました。

しかし、創立者を最も深く知ることができるのは、創立者自身の言葉です。

ここに収録した言葉は、いずれも牧田宗太郎が教育者として生涯を通じて大切にしてきた考え方です。百年以上前に語られた言葉でありながら、その一つひとつは、今日もなお私たちに問いを投げかけています。

折に触れて読み返し、創立者の思いに耳を傾けていただければ幸いです。

実践躬行

知識というものは、すべて実行が伴わなければ価値がないのであります。知って行い、行いから得た知識こそ、何物にもまさる尊いものであります。

― 牧田宗太郎 「伸び行くわれらが学園」 より

教育とは

要するに、教育の目的は人をつくることであり、人をつくることは、徳・知・体、三育の偏らざる実施によって、健全なる人格を陶冶することであります。

― 牧田宗太郎 「伸び行くわれらが学園」 より

個性の尊重

教育は、多くの人間を同じ一つの型にはめ込むこと、すなわち画一化することではなく、人々が持つて生まれたところの、各々異なった特色ある才能を正しく十二分に発揮させることであります。

― 牧田宗太郎 「伸び行くわれらが学園」 より

明朗と自主

これからの時代を担う女性は、明るく前向きに、自ら進んで行動することが大切である。

― 牧田宗太郎「伸び行くわれらが学園」より

Manners makes man

英国の教育は、第一に国民の品性を作ること、第二に自由な学校制度によって各自の天才を発揮させ、創作の思想を養成している。

― 『1919年牧田宗太郎の欧米視察旅行』ラグビー校訪問の記述より

人の価値

地位が高いか低いか、有名であるかどうかは、人間の価値を決めるものではない。

― 『牧田宗太郎物語』巻末語録より

生き方

こつこつと誠実に生き、その仕事に力を尽くす人こそ、尊重されるべきである。

― 『牧田宗太郎物語』巻末語録より

品性

高い地位を目指す前に、まず人としての品性を磨かなければならない。

― 『牧田宗太郎物語』 卷末語録より

自由と教育

自由とは、勝手に振る舞うことではなく、自らを律することの上に成り立つものである。

― 『牧田宗太郎物語』 卷末語録より

創立者の願い

今日まで、この教育方針の実現に向かって現れてきました努力が、今後も、教職員、卒業生、その他多くの人たちの協力によって受け継がれ、一人でも多くの有為の婦人が社会に送り出されることを希望いたします。

― 牧田宗太郎「伸び行くわれらが学園」より

参考資料

- ・『自傳教悦』
- ・『伸び行くわれらが学園』
- ・『牧田宗太郎物語』
- ・『1919年牧田宗太郎の欧米視察旅行』
- ・学校法人四條畷学園所蔵資料

牧田宗太郎 四條畷学園の原点

創立百周年記念出版

初版発行日 令和八年八月一日

発行・編集者 学校法人 四條畷学園

〒五七四―〇〇〇―一 大阪府大東市学園町六番四十五号

非売品



Since 1926

Narrative for the Next Century

学校法人 四條畷学園